恋する銀河
豊田有恒・星　敬編
集英社（文庫）
（10／15刊・¥320）

ロマンチックSF――というか、男と女の出会い小説がいくつか。基本的には、片思いの恋である。もともと、SFで描かれる恋というのは、プラトニックでほのかなものが多く、大恋愛小説は（なぜか）少ない。書き手側の、照れがあるのかもしれない。本書もまた、同様である。

ロマンティシズムの漂う「若草の星」、「梨湖という虚像」、「ほのかな夜の幻想譚」辺りが、その味に近い。作者（森下、梶尾、夢枕）の年代にも、関係があるのかないのか。若手（岬、高井）のほうは――「あなたの温もりを」、「シャドウ効果」など――わりあいドライである。あと、ちょっと異質なのは、皮肉さの感じられるかんべ「結婚ごっこ」、横田「宇宙からきた女性」。テーマそのものへの、反問でもある。

小説は、どれも面白い。読んで損はないだろう。巻末に、小松左京「袋小路」を据える構成はなかなかのものだ。ただ、どうせなら、前述の作品の内容（ウェット、ドライ、アイロニー）を考えた並べかたにしてほしかった。前半と後半で雰囲気が違い、このまま読むと、ややちぐはぐである。（俊）